

# 教師一丸でルーブリックを作成し、 単元ごとに目標・指導・評価を一体化

広島県立府中高校では、広島県教育委員会からの研究指定を機に、指導改善に着手した。当初から一貫して目指しているのは、学びを自律的に進めていく生徒の育成だ。育成を目指す資質・能力を、ルーブリックを作成して単元ごとのシラバスに落とし込み、単元内で指導改善を機能させる仕組みを構築した。

「動詞」に基づく整理を通して、  
資質・能力の概念が浸透

広島県立府中高校は、2015年度、広島県教育委員会「広島版『学びの変革』アクション・プラン」の「探究コアスクール」（以下、「コアスクール」事業）に指定されたことを機に、自校が目標とする生徒像の育成に向けて、資質・能力ベースの指導改善に取り組んできた。現在は、育成を目指す資質・能力を教科・科目の単元ごとに設定して教育活動を行い、その評価・検証を基に、さらなる指導改善を行う仕組みを構築している。教務主任の見浦進理先生は、

一連の取り組みのねらいを次のように説明する。

「定期考査でも、出題範囲が広いと、それだけで学習を諦めてしまう生徒が目立つようになっていました。そこで、生徒の意識を変えようと、指導改善のプロセスでは、教師については『評価』、生徒については『振り返り』の強化を目指しました。学習の計画を立てて、実践し、見直して、改善するといった学びのサイクルを、自ら回すことができる生徒を育むための仕組みを作りたいと思ったのです」

「コアスクール」事業の指定初年度は、「総合的な学習の時間（以下、

総合学習）」において育成を目指す資質・能力を、プロジェクトチームで明確化した。主幹教諭の中居寛美先生は、立ち上げ時の苦労をこう語る。

「当時の私たちは、資質・能力という言葉になじみがなく、広島県教育委員会の研修会に参加したり、関連書籍を読んだりするなど、育成を目指す資質・能力の言語化を手探りで始めました。そうした中で、資質・能力は、本校の教育理念である『知・徳・体』のバランスが取れた生徒を育成するための第一歩であるという理解に至りました」

そうして、「○○する」と動詞の形を用いた「学びの評価表」（図1）

を作成して、育成を目指す資質・能力を整理し、16年度は総合学習の指導改善に着手した。

「なじみのなかった資質・能力という概念は、『学びの評価表』によって教師間に徐々に浸透していきました。同表は、生徒にも配布し、総合学習を通じてどんな資質・能力が身につくのかを、生徒が意識できるようにしました。16年度の卒業式では、卒業生が答辞で、『日々の学習で自己を見つめ直し、さらなる高みを目指すことができてよかった』と述べていました。それがともうれしく、指導改善を進める原動力にもなりました」（中居先生）

# 「学校教育デザイン」を描く今と未来

## 教育活動共通のルーブリックを教師全員で作成

17年度には、資質・能力ベースの指導を教科にも導入し、教師が自分



主幹教諭  
**中居寛美**  
なかい ひろかず  
教職歴30年。同校に赴任して12年目。



教務主任  
**見浦進理**  
みaura しんり  
教職歴22年。同校に赴任して8年目。



教務部  
**藤井智美**  
ふじい ともみ  
教職歴10年。同校に赴任して6年目。

### 広島県立府中高校

◎校訓は「知性・探究・使命」。2018年度、広島県教育委員会「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」の指定を受ける。2年生全員が海外修学旅行でアメリカ・ハワイ州の姉妹校を訪問するなど、国際教育にも力を入れる。

- ◎設立 1912（明治45）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2019年度入試合格実績（現役のみ）  
国公立大は、神戸大、鳥取大、島根大、岡山大、広島大、九州大などに99人が合格。私立大は、明治大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ316人が合格。
- ◎URL <http://www.tucyu-h Hiroshima-c.ed.jp>

の授業で、どのような資質・能力を育んできたのかを学期ごとに振り返る機会を設けた。

「その頃には、『〇〇する』という

動詞は、教師間でかなり浸透していました。ただ、各教科・科目が立案した指導計画を見ると、教師ごとに動詞の定義が異なり、動詞を基に視線を合わせて指導計画を立てるのは難しいと感じました。そこで、指導計画の立案にこだわるよりも、実践後の振り返りに重きを置くことにしました。指導計画が多少粗くても、そこで歩みを止めずに、実践後に『この授業で育成を意識していたのは、〇〇だった』などと教師同士で語り合うことが、指導計画の改善につながると考えました」（中居先生）

ための評価の開発に着手し、ルーブリックを作成した。教務部の藤井智美先生は、当時の様子をこう語る。「夏季休業中に全教師が参加し、グループごとに生徒のよい点や課題を語り合い、育成を目指す資質・能力について議論を重ねる研修を行いました。『コアスクール』事業での取り組みが下地となり、教師一人ひとりが当事者意識を持ってルーブリック作成に携わっていました」

図1 「学び」に関する「動詞」に基づく「学びの評価表（基本形）」

評価項目	知識・技能、思考力・判断力			表現力・説明力
	学び方、学びの仕組み	教科・科目の学習内容	自己、他者・社会	
府中高生として初歩的・基礎的な段階である	学びの仕組みや自分の学び方について、定義・説明できる	学んだ用語・解法・概念について、定義・説明できる	自己や、自己と他者・社会とのかかわりについて、定義・説明できる	<ul style="list-style-type: none"> <li>簡潔に分かりやすく説明したり、他の言葉で言い換えることができる</li> <li>分かりやすい具体例や主な例を挙げることができる</li> </ul>
府中高生として求められる水準である	学びの仕組みや自分の学び方について、構造的・論理的に説明できる	学んだ用語・解法・概念について、根拠や構造と関連づけて説明できる	自己や、自己と他者・社会とのかかわりについて、異なる意見・視点と関連づけて説明できる	<ul style="list-style-type: none"> <li>関係や構造を、順序立てて分かりやすく説明できる</li> <li>根拠を挙げながら、簡潔に意見を述べることができる</li> </ul>
水準が高く(深く)発展的である	学びの仕組みや自分の学び方について、検証し、省察できる	学んだ用語・解法・概念について、自ら活用・応用できる	自己や、自己と他者・社会とのかかわりについて、課題発見・解決策を提案し続けることができる	<ul style="list-style-type: none"> <li>価値や意義を、分かりやすく説明することができる</li> <li>課題の解決策を提案することができる</li> <li>自ら新たな課題を設定し、説明することができる</li> </ul>

\* 学校資料を基に編集部で作成。

「コアスクール」事業を通じて、育成を目指す資質・能力についての理解は深まり、18年度からは、広島県教育委員会「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」の指定を受け、目標実現の

「コアスクール」事業を通じて、育成を目指す資質・能力についての理解は深まり、18年度からは、広島県教育委員会「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」の指定を受け、目標実現の

## 単元シラバスで、単元ごとに指導と評価を一体化

教師一丸となって具体的な目標として設定した資質・能力の育成に向けて、教科の授業では、19年度から、教科・科目ごとに各学期の学習内容

図2 育成を目指す資質・能力と、ルーブリック (抜粋)

育成を目指す資質・能力		S
知識・技能	知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>基礎基本となる知識や技能を身につけて課題解決に生かすことができる。</li> <li>知識を概念化して捉えることで他の場面技能を自在に活用できたりする。</li> </ul>
	読解力	<ul style="list-style-type: none"> <li>必要な情報・データを限られた時間の中や意義を判断・説明できる。</li> <li>筆者の主張等を簡潔にまとめて、価値やる。</li> </ul>
論理的思考力	データ (情報・整理)	<ul style="list-style-type: none"> <li>適切な分析方法を使いながらデータを分質を見極めるとともに、新たな課題を見える。</li> </ul>
	文章 (読み取り)	<ul style="list-style-type: none"> <li>情報の関連や構造を把握し、筋道立ててえを構築することができる。</li> <li>分類した情報について、その優位性につとができる。</li> </ul>
	関連性・構造的性	<ul style="list-style-type: none"> <li>逆の立場の意見等を踏まえながら考察しその論拠を基に説明できる。</li> </ul>
場面把握力	データ (整理・分析)	<ul style="list-style-type: none"> <li>場面・周りの状況に応じて、自分の役割適切に対応できるとともに、周りによいとができる。</li> <li>現状を改善する視点を有し、先のことをきことを把握して行動できる。</li> </ul>
	場面・状況・文脈把握 ブレイクスルー	<ul style="list-style-type: none"> <li>複数の要素を統合して、効果的な方法でげるとともに、説得力のある表現に表す</li> <li>伝える時に、最も効果的な方法を選択して相手に分かりやすく表現できる。</li> <li>相手や場面、目的、意図に応じて、ふさでなく臨機応変にパフォーマンスなどの</li> </ul>
表現力 (説得力)	文章 図 成果物 実技等	<ul style="list-style-type: none"> <li>構成力</li> <li>明解性</li> </ul>
	話し方 聞き方	<ul style="list-style-type: none"> <li>態度</li> <li>話力</li> </ul>
	学びを 生かす力	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題発見、課題解決</li> <li>課題の発見・解決に向け、物事に当事者り組もうとする。</li> <li>社会における課題について、自己の課題見いだして取り組もうとする。</li> </ul>
学ばに向かう力・人間性等	協働	<ul style="list-style-type: none"> <li>役割理解、参画・貢献</li> <li>他者や集団とのかかわりの中で、自分の社会に貢献しようとする。</li> <li>自分の考え方と自分とは異なる考え方をれのよさを見いだしている。</li> </ul>
	学びの 継続力	<ul style="list-style-type: none"> <li>振り返り (省察) 展望</li> <li>学習の仕方や進め方について、検証、省将来の学習や生活に生かそうとする。</li> <li>具体的な目標や計画を立て、継続的に実</li> </ul>

\*学校資料を基に編集部で作成。

や育成を目指す資質・能力をまとめた単元シラバス(図3)を活用している。教師間での指導の目線合わせのためだけでなく、生徒が単元を通じて身につけるべき資質・能力を振り返りやすいように、記載内容に留意した。

単元シラバスには、その単元で育成を目指す資質・能力について、どのような状態になれば「S」なのか、「A」なのか、ルーブリックを基に到達段階を明記。単元の最後の授業では、その到達段階に基づいて、生

徒は、「単元振り返りシート」を用いて振り返り、各単元で育成される資質・能力について4段階で自己評価し、その根拠も記述する。教科担当者、生徒が書いた「振り返りシート」を基に、育成したい資質・能力が十分に育まれたかを検証し、その結果を授業改善に生かす。また、シラバスには、授業内で行うパフォーマンス課題や、定期考査の内容、さらには単元での学習内容と他教科や既習事項との関連性までも示した。

生徒は、教科・科目ごとに単元シ

ラバスをファイリングし、どんな資質・能力を身につけるための学習なのか、いつでも確認できる。一方、教師にとっては、指導と評価の両面における指針となっている。

「単元シラバスは、生徒が自身の学びを振り返ることができるように、生徒目線を大事にするとともに、教師にとっては、『どういった資質・能力の育成を目指して授業とテストを行うのか』といった、指導の具体化を求めるフォーマットにしています」(見浦先生)

特別活動や学校行事でも、評価活動を行っている。例えば、文化祭などの主要な学校行事の実施要項には、育成を目指す資質・能力などを明記。事後には、アンケート形式で「どのような点で頑張ったか」「自分はどう変わったか」など、生徒に自己評価させ、面談でそれらの気づきを語らせることを重視している。

### 「教科横断型活用問題」で複数教科の統合問題を出題

育成した資質・能力を評価する場の1つが、1・2年生の3学期に実施する「教科横断型活用問題」だ。問題は、複数の教科・科目の知識を基に、考えを論理的に表現する力を測る「教科統合型」と、文章を読み、その内容を踏まえて自分の考えを論述する「問いかけ型」の2種類で構成され、内容は、各教科会などで検討・吟味している。

「生徒には、論理的思考力や表現力、読解力など、本校が育成を目指す様々な資質・能力を総合的に測定するテストだと説明しています」(藤井先生)

テスト結果は、生徒の資質・能力

# 「学校教育デザイン」を描く今と未来

図3 2019年度「コミュニケーション英語I」単元シラバス(抜粋)

令和元年度 外国語(英語)科【コミュニケーション英語I】単元シラバス No. 1

教科	外国語	科目	コミュニケーション英語I	単位	4	学年	1学年	予定時期	1学年 3月
単元名	Lesson What Can Blood Type Tell Us?								
教科書	教科書								

「育成したい資質・能力」

各教科の「見方・考え方」

「単元目標」

「育成したい資質・能力の具体的な内容」

「単元目標」

「単元シラバス」から学習内容(資質能力ではない)が一致するものがあれば科目と内容を記入(新単元) 一致するものがない場合は「——」を記入

「単元目標」と「育成したい資質・能力」を一致させること

「単元目標」と「育成したい資質・能力」を一致させること

「単元目標」と「育成したい資質・能力」を一致させること

\* 学校資料を抜粋し、編集部で改変して掲載。

を多面的に捉えるデータの1つとして活用。知識・技能を主に測る模擬試験の結果とクロス分析をしてみたが、明確な相関関係は見られなかったと言う。

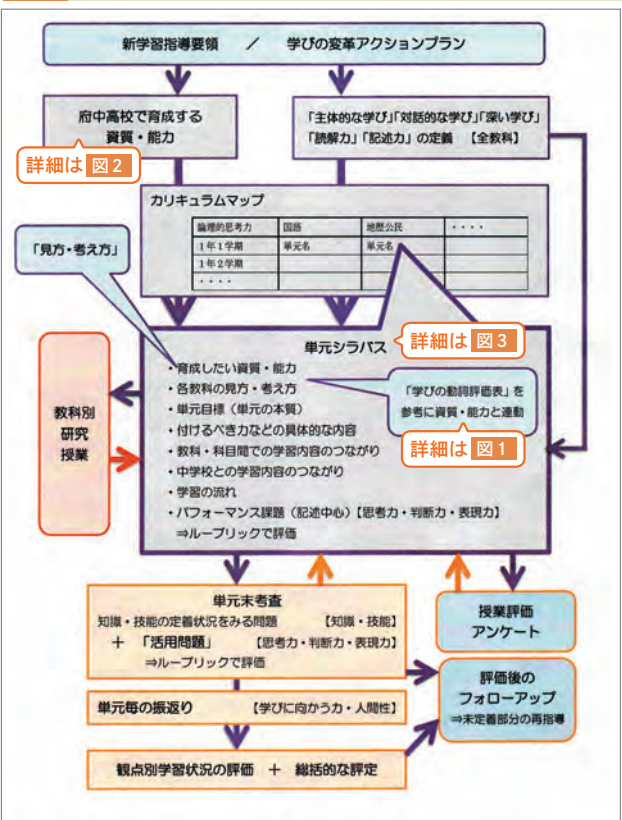
「模擬試験では思うように点数が取れなかったけれども、本テストでは得点できていた生徒もいました。思考力・判断力・表現力が問われる入試が拡大していく中で、教科指導の改善はもちろん、進路指導にも生かされています」(中居先生)

## 定期考査を廃止し、単元末考査でこまめに定着度を測る

同校は、20年度、さらに改革を進め、全教科・科目において、定期考査を廃止し、単元ごとに「単元末考査」の実施に踏み切る。そのねらいは、短期スパンで学習内容の定着度を確認する場を設け、生徒に学習内容をしっかりと定着させることだ。

「定期考査では、授業で学んできたら、その内容を確認する試験までか

図4 「府中学びの一体改革」



\* 学校資料を編集部で改変して掲載。

間が長く、しかも複数の単元が試験範囲になるため、すべての単元の定着度を確認することが難しい状況です。理解があまりない単元があっても、試験で問われなければそのままにしてしまいう生徒もいました。そこで、単元ごとに試験を実施することで、課題を早期に洗い出して対応できるようにし、学習内容の定着度を高めようと考えました」(中居先生)

単元末考査では、知識・技能をより丁寧に問うとともに、思考力や表現力などを測る問題を約2割出題する方針だ。

学校教育目標の達成に向けて、育成を目指す資質・能力を明確化し、ループリックや単元シラバスの運用、単元末考査を通じて、教師と生徒は振り返りを行い、それを基に改善すべき点を修正していく。その一連の流れを「府中学びの一体改革」(図4)として可視化した。

「生徒の希望進路の実現に向けた支援を強化するとともに、単元末考査を含めた教育活動のすべてを、生徒が自身の学びをつくり上げるための仕組みとして、その確立を目指していきます」(中居先生)